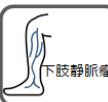


外来の指標



糖尿病

[糖尿病の患者の血糖コントロール](#)



下肢静脈瘤

[下肢静脈瘤手術実施件数](#)



アレルギー

[食物経口負荷試験実施件数](#)



救急車

[救急車受け入れ割合](#)



無料・低額診療

[無料・低額診療申請件数](#)



患者満足

[外来患者満足度](#)



外来通院患者の糖尿病コントロール

＜糖尿病とHbA1c＞

ヘモグロビン（Hb）とは、血液の赤血球に含まれているタンパク質の一種で、酸素と結合して酸素を全身に送る役目を果たしています。このヘモグロビン（Hb）は、血液中のブドウ糖と結合するという性質を持っているんです。そのブドウ糖と結合した物の一部分が、ヘモグロビン A1c と呼ばれています。

血液検査の結果、この HbA1c の値が高ければ高いほどたくさんのブドウ糖が余分に血液中にあってヘモグロビンと結合してしまったということがわかります。

正常な成人の HbA1c 値は 6.2%以下とされています。

一方、それ以上の数値ですと、高血糖状態が続いていた、ということになります。この数値が、8.4%を超えた状態が長く続きますと、色々な合併症を起こすと言われていいますので、多くの医療機関では、この数値を下げることに主眼がおかれています。

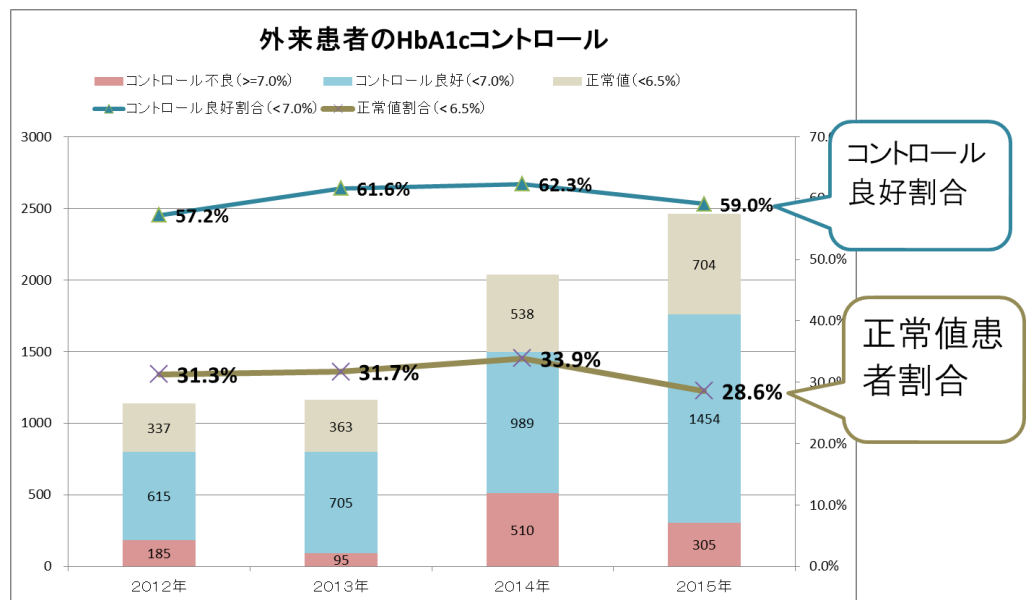


＜当院の取り組み＞

糖尿病患者の病状を安定させるには、適切な食事療法や運動療法の指導および薬物療法の実施が必要です。当院では患者の血液検査のデータから異常値を抽出、糖尿病治療薬使用患者の抽出により、指導が必要な患者をリストアップし、個別の栄養指導や集団糖尿病教室の定期的開催、糖尿病患者会の運営等、積極的な指導の実施に取り組んでいます。

＜指標と結果＞

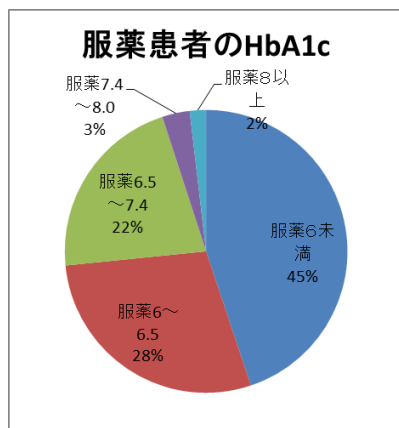
本指標では、外来患者の中の A) HbA1c < 7.0%: コントロールが良好な患者の割合 と、 B) HbA1c <



6.5%：正常値の患者の割合をみることで、診療の質を評価しています。

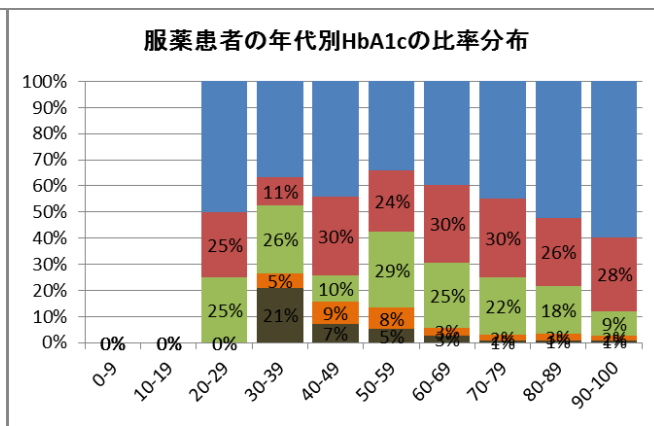
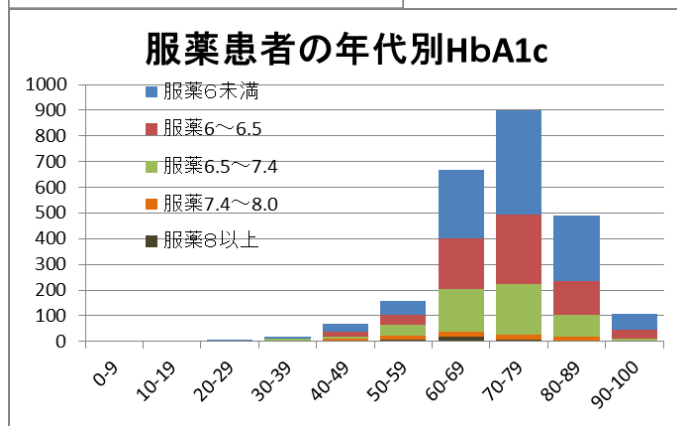
本年は「コントロールが良好な患者の割合」「正常値の患者の割合」共にやや低下しました。

また、当院では糖尿病薬を処方している外来患者に絞ってHbA1cの調査も行っています。



服薬患者においては73%が6.5未満を維持し、95%が7.5未満となっております。

年代で比較すると、60代以上の患者はコントロール良好ですが、若年化するほどにコントロール不良の患者割合が増加傾向になり、これらの若年性糖尿病患者の対応が課題となっております



[外来 TOP に戻る](#)



下肢静脈瘤の手術実施件数

下肢静脈瘤とは足の静脈が太くなってコブ状に浮き出て見えるようになった状態をいいます。症状は足がだるい、重い、痛い、かゆい、じんじんとする、むくむ、冷える、こむらがえり（足がつる、足の色が黒くなる、潰瘍ができるなどが起こりやすくなります。特に長時間同じ姿勢で立ったままでいると、夕方に症状が増悪することが特徴的です。朝にはむくみや痛みが軽減していることが多くみられます。かゆみも静脈瘤の症状であることが多く、静脈瘤の治療をするとよくなります。

さらに病状が進むと、足の皮膚の色がついたり（色素沈着）、皮膚のただれ（潰瘍）ができることがあります。こうなってからでは、治療に時間がかかり、きれいな皮膚に戻ることは難しくなります。

下肢静脈瘤は下肢の静脈の逆流防止弁が壊れた為に、そこに血液が溜り、ふくらはぎ辺りに血管がポコポコと瘤状に浮いて見える様になった物です。

妊娠・出産を契機に発症することが多いので、女性に多いと言われていています。また、立ち仕事に従事している人、特に歩き回らず何時間も立ちっぱなしになるという場合は、下肢静脈瘤を発症しやすく、この場合には男性にも発症します。

発症後、自然に治ることはなく、年を経るごとに徐々に進行していきます。同情報元より、50歳代以上の患者が占める割合は、女性84%・男性74%とやはり年配の方の占める割合が高いため、加齢は下肢静脈瘤に関係すると言えます。

当院では専門医による治療・手術を毎週水曜日午前の外科外来にて行っています。

手術は症状により異なりますが日帰り～1泊で行えます。

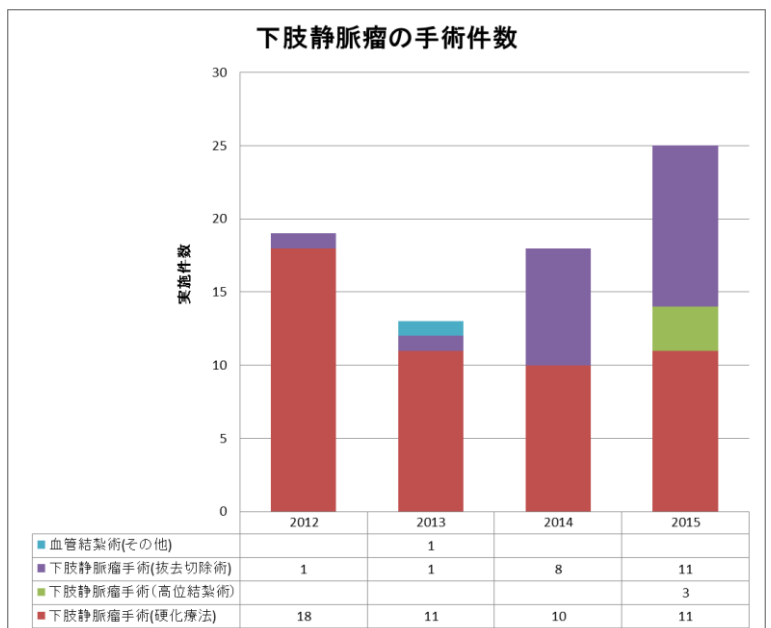
近隣に同様の手術を行える医療機関がないことから、需要は増加傾向にあります



肢静脈瘤の症例 1



下肢静脈瘤の症例 2



[外来 TOP に戻る](#)



食物アレルギー検査実施件数



食物アレルギーは子どもに多くみられるのが特徴で、6歳以下の乳幼児が患者数の80%近くを占め、1歳に満たないお子さんでは10~20人にひとりが発症しています。

子どもに食物アレルギーが多いのは、成長段階で消化機能が未熟で、アレルゲンであるタンパク質を小さく分解（消化）することができないのがひとつの要因と考えられています。そのため、成長にともなって消化吸収機能が発達してくると、原因食物に対して耐性（食べられるようになること）がつかう可能性が高いのです。しかし、中には大人になっても症状が続くものもあり、幼児期後半以降（成人も含む）に発症した食物アレルギーは治りにくいとされています。

アレルギー症状では、最も多いのが皮膚症状（じんましん、痒い、皮膚が赤くなる、顔が腫れるなど）です。呼吸器症状（咳、ゼイゼイする、呼吸困難）、粘膜症状（口が腫れる、目が赤くなる腫れるなど）、消化器症状（腹痛、吐く、むかむかする、下痢）などの症状も同時または別々に出現します。重症では血圧が下がって意識がなくなる、ぐったりなるアナフィラキシーショックを呈することもあります。



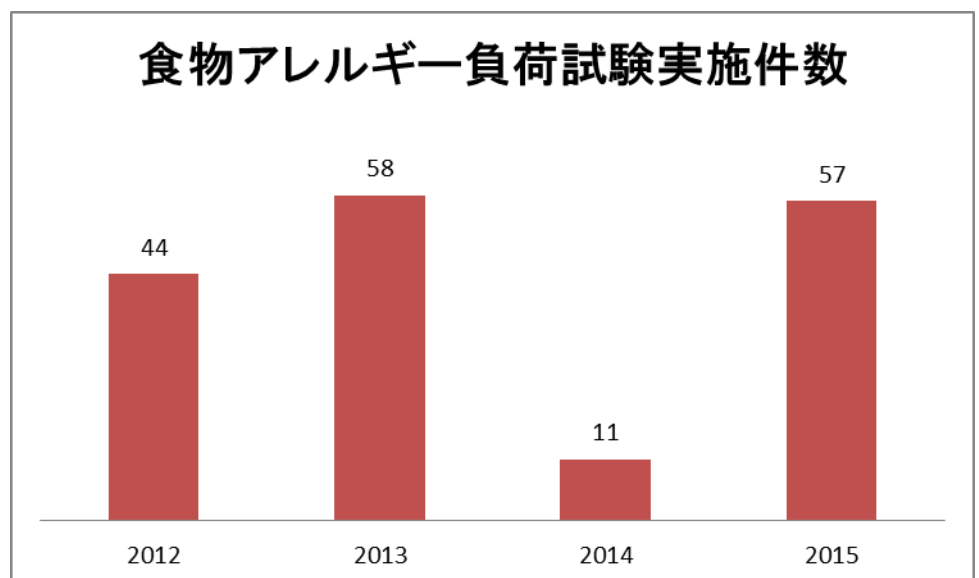
みどり病院小児科ではアレルギー外来を行い、日帰り入院の食物経口負荷試験も行っております。食物経口負荷試験は、食物アレルギーの正確な診断や、除去してきた食品が食べられるようになったかどうか（耐性獲得）の確認のための検査です。



検査食一例

[外来 TOP に戻る](#)

食物アレルギー負荷試験実施件数

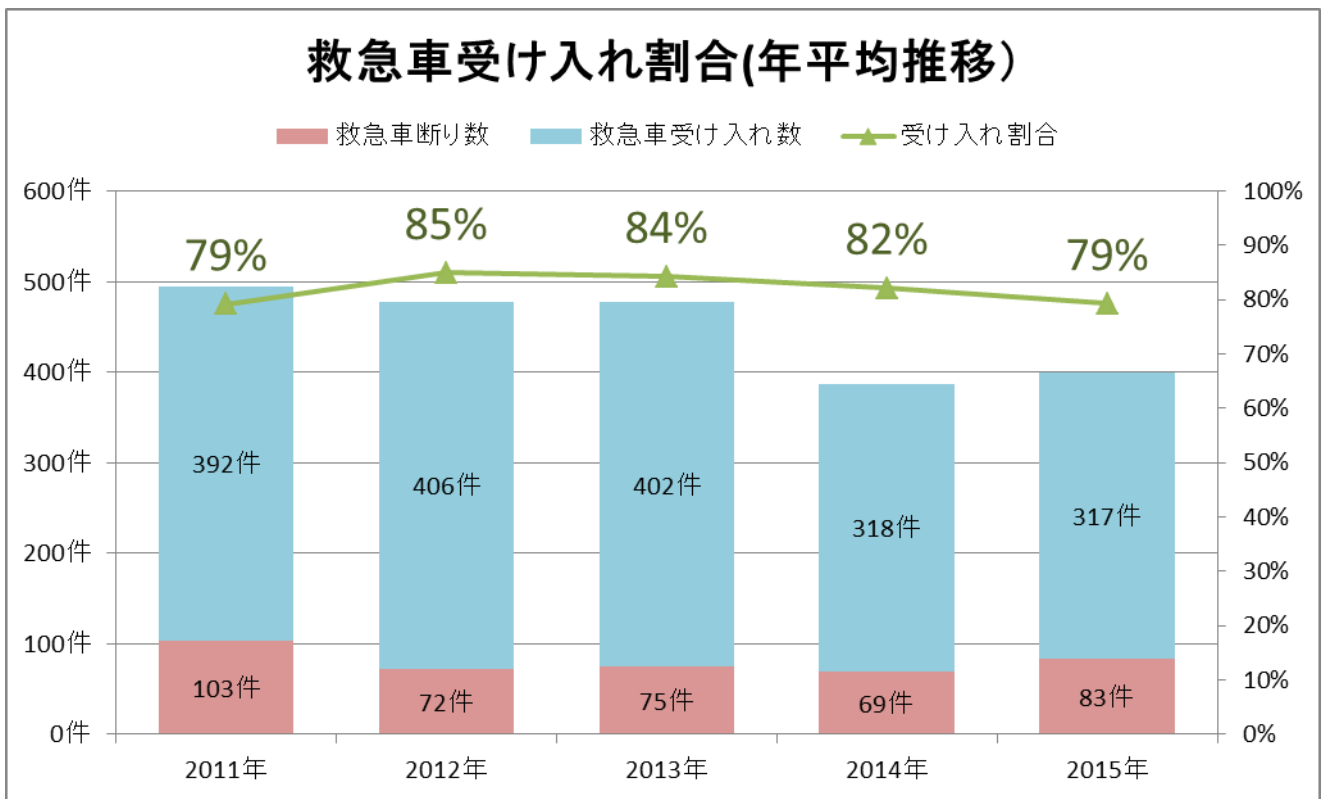




2015年は受入割合が減少しております。

2014年10月の回復期リハ病棟開設以降、一般急性期病棟半減により受入可能な病床数が大幅に減少しましたが、「地域からの要請を断らない」を合い言葉に積極的受入に取り組んできました。

しかし完全満床の為に断らざるえないケースも発生し、結果として件数・割合共に救急車断りケースが増加しました。



[外来 TOP に戻る](#)



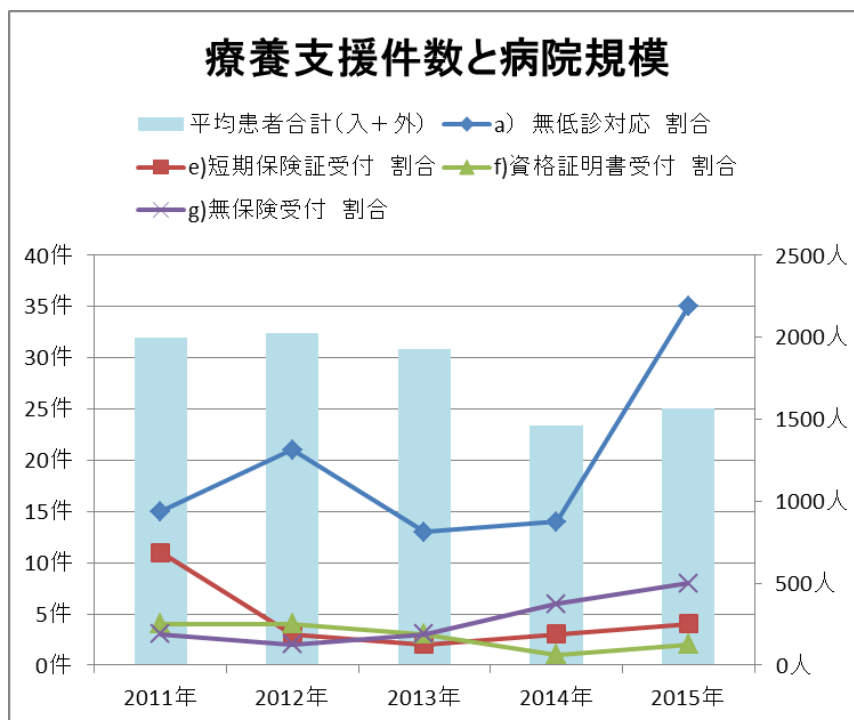
無料低額診療申請件数

当院では2009年6月から制度開始「無料低額診療事業」を開始しました。「お金のあるなしで医療が差別されてはいけない」という信念のもとで、差額ベッド料を徴収せず、困難を抱えた人たちの「最後のよりどころ」として医療や介護に関する相談活動をすすめています。

国民の経済格差が社会問題となる中、当院でも各種相談が増加し、無料低額診療も増加しております。

当院では生活困窮者に対し、無料低額診療事業以外にも生活保護申請の支援など各種公的制度の案内支援を行っております。

お問い合わせは、当院よろず相談室までご連絡ください。





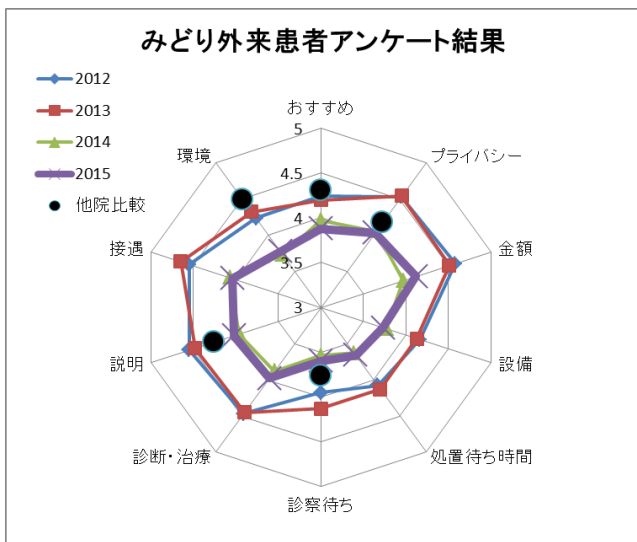
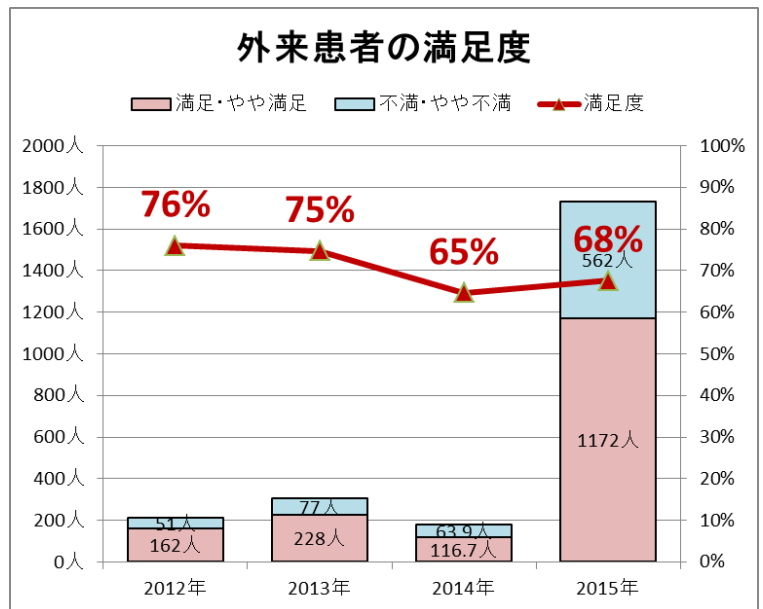
患者満足度

アンケートは「治療の結果」「職員の接遇」「院内設備」など複数の項目で実施いたしました。各項目に対し5段階評価を行って頂き、「5：満足している」「4：やや満足している」の合計の割合を満足度として算出しています。

本年は満足度が減少しました。

評価が低い項目は“施設が古い事への不満”と“外来待ち時間”。ただし外来待ち時間については他院と比較すると大きな差はありません。

また経年比較を行った時、接遇や患者対応への満足度が落ち込んでいる点が改善の必要な項目です。当院ではこの結果を受け、再度患者・家族の立場にたった民医連医療の原点に戻り、患者家族対応・接遇について研修・学習会を繰り返し行い、職員の質の向上に取り組んでおります。



外来アンケート

	たいへん良い	良い	普通	悪い	大変悪い	良い以上 (%)
おすすめ	37	80	51	3	0	68%
プライバシー	49	80	43	0	0	75%
金額	62	69	42	0	0	76%
設備	35	68	66	6	0	59%
処置待ち時	26	68	67	6	2	56%
診察待ち	30	63	64	13	3	54%
診断・治療	47	80	45	3	0	73%
説明	49	83	39	3	0	76%
接遇	52	84	36	3	1	77%
環境	32	78	61	4	1	63%

[外来 TOP に戻る](#)